

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 Utari Novella

論 文 題 目

インドネシア語における限定表現

論文審査担当者

主査	名古屋大学教授	佐久間 淳一
委員	名古屋大学教授	齋藤 文俊
委員	名古屋大学准教授	宮地 朝子

論文審査の結果の要旨

【本論文の概要】

本論文で論者は、インドネシア語の限定副詞 *saja*, *hanya*, *sekadar*, *semata-mata* を取り上げ、これらの限定副詞の意味、用法の違いについて論じている。

まず第 1 章では、インドネシア語の概略について記述し、インドネシア語の限定表現に関する先行研究を概観している。限定副詞に関する研究はそれほど多くなく、数少ない研究も、限定副詞間の意味、用法の違いについては、十分に論じることができていない。

それを受けて、第 2 章では、限定副詞 *saja*, *hanya*, *sekadar*, *semata-mata* の意味・用法を、限定以外の意味で使われる場合も含めて、順次検討している。まず、*saja* は限定する語に後置される点で他の副詞と異なる。同類の他の要素を排除することを表すのが *saja* の基本的な意味であり、用法としては、唯一性、多数性、持続性、最低限度、極限性など多様な意味を表す。また、*saja* は疑問詞と共起すると限定以外の意味を表し、アスペクトを表す副詞やモダリティを表す副詞と共起することもある。一方、*hanya* は、基準を満たしていないことを表すのが基本的な意味で、しばしば、残念、不満足といった意味合いを伴う。しかし、*hanya* は、対比や強調を表す接続詞としても使うことができる。次に *sekadar* は、限定する語に前置される点では *hanya* と同じだが、出現可能な位置が述語の前に限られている点で異なる。また、*sekadar* の焦点作用域は *hanya* よりも狭い。限定された要素がそれ以上でもそれ以下でもないことを表すのが *sekadar* の基本的な意味であり、特定の否定表現と共起する用法もある。最後に、*semata-mata* は限定する語に前置され、他の限定副詞よりも、書き言葉で使われることが多い。唯一絶対という意味を表すのが *semata-mata* の基本的な意味で、特定の前置詞や副詞と共起することが多い。

インドネシア語の限定副詞は、そのうちの二つ、あるいは三つを組み合わせることができる。第 3 章では、どのような組み合わせが可能なのか、また、組み合わせが可能な場合、それがどのような意味を表すのかを考察した。その結果、*saja* と *hanya* が組み合わせられると、*saja* が限定する語に後置されている場合は *saja* の意味が、前置されている場合は *hanya* の意味が強く現れること、*saja* と *hanya* 以外の副詞との組み合わせでは、その副詞の意味が強く現れること、限定する語の前に *hanya* に続けて *saja* 以外の限定副詞が並ぶ場合、後者の意味が強く現れることが分かった。

これらの限定副詞はそれぞれ意味が異なるものの、実際には混同されている例も多くみられる。第 4 章では、これらの限定副詞が互いに置換可能かどうかを検証した。その結果、多くの場合、置き換えると異なるニュアンスを表すようになることが確認された。

第 5 章では、限定副詞と同様の機能を持つ日本語のとりたて助詞「だけ」「しか」との比較を試みた。

論文審査の結果の要旨

【本論文の評価】

研究の蓄積が乏しく、実際にインドネシア語の母語話者の間でも混同されていることが多いインドネシア語の限定副詞 *saja*, *hanya*, *sekadar*, *semata-mata* について、より口語的な表現である *cuma* や派生表現も含め、各副詞の意味や用法を多面的かつ網羅的に明らかにしたことは、インドネシア語の堅実な記述研究として、それ自体、高く評価できる。とりわけ、各副詞が表す基本的な意味を明らかにしたこと、また、異なる意味を持つはずの限定副詞が組み合わせられて使われる場合に、その組み合わせが表す意味について検討していることは、インドネシア語の意味論的研究の発展に大いに寄与する貢献と言える。

また、それぞれ意味や用法に違いがあるとはいえ、重なり合う部分があることも事実であり、その違いを、ニュアンス的な部分も含めて明示的に示すことは必ずしも容易なことではない。しかも、論者はそれを日本語で論じており、母語でない言語で、限定副詞間の意味・用法の差異について説得力のある説明を与えることに成功していることは、大いに評価に値することだと考えられる。

もちろん、本論文に課題がないわけではない。それぞれの副詞が持つ基本的な意味は明らかになった一方で、特に *saja* や *hanya* のように多様な意味で使うことができる副詞の場合、例えば、*saja* の極限を表すとされる用法や *hanya* が日本語の「こそ」に相当するような意味を表す用法、あるいは *saja* や *hanya* が限定以外の意味を表す用法などについては、それらの意味と基本的な意味との関連や派生関係に関する説明に十分でない部分が残っている。限定副詞の意味や用法の違いを説明するにあたり、インドネシア語の例文に対して論者自身が当てた日本語の訳語に頼っている部分もないわけではない。

また、論者は、第5章でインドネシア語の限定副詞と日本語のとりたて助詞との比較を試みているが、確かに、インドネシア語の限定副詞を日本語に翻訳すると、とりたて助詞が対応することが多いものの、そもそも、限定副詞ととりたて助詞では統語要素としての自立性に違いがあり、そうした点を検討しないまま、両者を比較しようとしていることは、手続き的に安直と言わざるを得ない。比較の対象も日本語の方は「だけ」と「しか」に限定されており、インドネシア語と日本語が一対一で対応するわけではない以上、インドネシア語の限定副詞の意味や機能を明らかにする上で、日本語との比較をすることにどれだけ意義があったかについては疑問もある。

しかしながら、こうした欠点は、いずれも、今後の研究を通じて克服されることが期待できるものばかりであり、インドネシア語の記述研究として本研究が有する重要性やその価値を減じるものでは全くない。よって、審査委員一同、一致して、本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと判定した。